

東京 2020 オリンピアン・パラリンピアン記録

東京 2020 オリンピアン・パラリンピアン記録 —橋田舞子—

橋 田 舞 子

【経歴】

2007年～2013年 京都市立北白川小学校
2013年～2016年 京都市立近衛中学校
2016年～2019年 私立秀明英光高等学校
2019年～2023年 日本体育大学体育学部体育学科

【競技歴】

2013年	第35回全国JOC ジュニアオリンピックカップ水球競技 (春・夏)	優勝
2014年	第36回全国JOC ジュニアオリンピックカップ水球競技 (春・夏)	優勝
2015年	第37回全国JOC ジュニアオリンピックカップ水球競技 (夏)	優勝、 (春) 準優勝
2015年	第8回アジアエージグループ選手権大会	優勝
2016年	第38回全国JOC ジュニアオリンピックカップ水球競技 (夏)	優勝
2017年	第3回全日本ジュニア (U17) 水球競技選手権大会	優勝
2018年	第18回アジア競技大会	準優勝
2019年	第18回世界水泳選手権	出場
2019年	第95回日本選手権水泳競技大会水球競技	準優勝
2020年	第96回日本学生選手権水泳競技大会水球競技	優勝
2020年	第96回日本選手権水泳競技大会水球競技	準優勝
2021年	水球ワールドリーグスーパーファイナル	7位
2021年	東京 2020 オリンピック	出場

1. 競技との出会い

水泳はスイミングスクールで4歳から始めたが、最初は水泳が嫌いで5歳で一度水泳をやめることにした。しかし、兄がやっている水球の練習や試合を見ているうちに水球に興味を持ち、小学校2年生でもう一度水泳を習い始めた。私が通っていたスイミングスクールでは、水球コースに入るためには一度育成コースに入り、ある程度の泳

力を身につけなければならなかった。そのため、すぐに水球を始めることはできなかったが、育成コースの時にも何回か水球コースの体験に行っており、ますます興味が湧いていた。

小学校3年生から水球コースで水球を習い始めた。小学校3年生の春に初めての大会に出場し、私は何もできなかったが、チームメイトのおかげで優勝することができた。その時、いつか自分の力で絶対に優勝したいと強く思った。そこからは、

週6回の練習も体調不良以外では休まず通いつけた。しかし、小学校5年生の時に全国大会で一度3位になったが、その後も優勝することはできなかった。

中学校ではある1人のコーチに出会い、そのコーチが私の実力を大きく成長させてくれた。小学生の時とは比べものにならないほどきついスイム練習、レベルの高い技術の指導があり、徐々に実力がついていくのを自分でも実感していた。その練習の成果もあり、中学校1年生の春夏、2年生の春夏、3年生の夏の全国大会では優勝することができた。しかし、3年生の春は準優勝となり最後に悔しい思いをした。

高校は地元を離れ、埼玉県の水球の強豪校に進学した。そして水球部に入部し、生活は学校の寮で送っていた。初めは慣れないことばかりで不安もあったが、水球部の生徒は全員が寮で生活していたため、すぐに慣れ、楽しく過ごすことができていた。高校の水球部はレベルが高く毎日切磋琢磨しながら充実した練習を送っていた。辛い時は助け合い、嬉しい時は一緒に喜ぶ。学校でも寮でも常に一緒にいる仲間達とのチームワークは抜群で、高校の全国大会は3年間優勝することができた。そして、高校2年生の3月に初めてA代表に選ばれ、その時から東京オリンピックの代表にも選ばれて出場することが目標となった。

2. 日体大の思い出

小学生から高校生まで水球を続けていくなかで色々なカテゴリーの試合を見てきたが、大学の女子水球では日本体育大学、東京女子体育大学、秀明大学のこの3校が強豪校として名を連ねていた。

高校2年生の時から大学の進路を考え出すようになり、最初は地元である京都の先輩が1番多く所属していて馴染みやすそうという理由から、東京女子体育大学に進学しようと考えていた。しかし、高校2年生で大学生の試合観戦に行った時、

どこのチームよりも楽しそうに水球をしていたのが日本体育大学だった。プールに入っている選手、ベンチから試合を盛り上げる選手、スタンドから声援を送る選手とそれぞれの選手が自分のやるべきことを全うし、チームの一体感が伝わってきた。その時に、日本体育大学に進学すれば、環境やチームの雰囲気も良く、自分が思い描いているような楽しい水球ができるのではないかと思い進学を決めた。また、多くの日本代表選手を輩出している日本体育大学にはレベルの高い選手が多く所属しており、日頃からレベルの高い選手と一緒に練習することで、東京オリンピック出場という目標達成にも大きく近づくと考えたことも決め手である。

大学に入学し、水泳部水球ブロックに入部してみると、私が思っていたようにチームメイト全員が仲良く、プールの中では先輩後輩関係なく意見を言い合えるような理想のチームだった。大学でもチームメイト全員が同じ寮で生活をしてきたため、練習中は集中してストイックに、練習が終わるとみんなで寮に帰りワイワイ楽しく過ごす日々が楽しかった。試合の前日には寮にあるミーティングルームに全員が集まり、戦術の最終確認をした後ホールケーキを食べていたことも非常に思い出深い。水球の練習では辛いことやしんどいことの方が多かったけれど、それが糧となり日本学生選手権4連覇に繋がったのだと思う。特に4年目は私達の代で、4連覇がかかっておりチームの主将としても大きなプレッシャーがあったため、優勝できた時の喜びは一生忘れられないものになった。

大学生活では、日体大の授業で多くのスポーツを経験することができた。特にダンスの授業では、自身はダンスが苦手なことから、テスト前にはチームメイトと一緒に寮で猛練習していたことが印象的である。他にも、他競技の友達との会話から新しい知識や学びを得ることもでき、自身の成長へと繋げることができた。

3. オリンピックの感想

新型コロナウイルスの影響で東京 2020 オリンピックの延期が決定した。他競技では東京オリンピック内定者が発表されているものもあり、その内定が取り消されるという事態も発生していた。水球の東京オリンピック内定者はまだ発表されていなかったが、2020年に合わせて何度も合宿を行い、身体コンディションやメンタルを整えていたため、正直私にとってはダメージが大きかった。しかし、落ち込んでいる暇もなく1年後にむけて合宿は再スタートした。合宿で代表候補選手たちに会うと、私よりもダメージを受けている選手もいれば切り替えができている選手もいた。その時私はまだ切り替えができていなかったが、時間が経っていくにつれて少しずつ前向きに考えることができるようになり、水球女子はオリンピック初出場であったため、水球をやっている子どもたちに希望や勇気を与えたいと思った。そんな時、新型コロナウイルスが蔓延するなかでの東京オリンピック開催への批判が現れ、本当に東京オリンピックは開催されるのかという不安が募った。そこからは、不安を感じながらも開催されることを信じて、ひたすら前向きに練習するしかなかった。東京オリンピックの開催は決定し、水球でも東京2020オリンピックの代表内定選手が発表され、東京オリンピックに出場するという目標を達成することができた。

開会式が始まり新国立競技場に足を踏み入れた瞬間、無観客ではあったが全身に鳥肌が立ったのを今でも覚えている。初めてのオリンピックは、他の大会とは違うような独特な雰囲気があり、私は普段あまり緊張するタイプではないがオリンピックの舞台に立つと一気に緊張が押し寄せた。しかし、試合が始まると緊張は解け、いつも通りのプレーをすることができた。結果は予選敗退となり、良い結果を出すことはできなかったが、自分の精一杯の力は出し切ることができた。また、東京オリンピックを通して課題も見つかり、次の

試合に繋がる重要な大会となった。オリンピックという素晴らしい舞台で日本代表として戦えたことを誇りに思うと共に、コロナ禍のなかでのオリンピック開催に携わって下さった全ての方々に感謝を伝えたい。

4. 今後の人生

東京2020オリンピックが終了し、2回の日本学生選手権を優勝、2回の日本選手権を準優勝、アジア選手権を準優勝で終え、大学4年生の11月に水球を引退した。

今後は、大学を卒業したら保健体育教師として地元である京都府で就職することが決まっているので、選手ではなく指導者として水球に携わっていきたくて考えている。今までの経験から自分が学んできた知識や技術を、次世代を担う選手達に伝えていきたい。そして、勝敗にこだわることも大切だが、なによりも水球を楽しんでやるのが大切だということも選手達に伝えたい。指導者側になっても自分が成長できるよう、選手との積極的なコミュニケーションや選手の理解に努め、日々精進していきたい。また、ヨーロッパでは水球を国技と呼ぶ国もあるほど有名だが、日本ではマイナー競技なので、少しでも水球というスポーツを多くの人に知ってもらえるよう水球クリニックなどの普及活動にも参加していきたい。

水球以外の生活でも4月からは環境や人間関係が大きく変化し慣れないことばかりで不安もあるが、少しでもはやく仕事や環境に慣れ、生徒や他の教師の方々と人間関係も構築し、信頼されるような一人前の教師になれるよう頑張っていきたい。

5. 日体大生へ一言

どの競技をするにあたってまずは自分がやっている競技を楽しむべきだと思います。もちろん目標を持ち、それを達成するためにひたすら日々

の練習に取り組むことも同じくらい大切です。しかし、私は水球が楽しいと思えたからこそ、今までの逆境にも打ち勝ち、目標を達成することができました。大学生活は4年間という限られた時間しかないなので、悔いが残らないよう、自分の競技を全力で楽しんで欲しいと思います。



(受理日：2023年3月30日)